Bestie

秋元未来
秋田南高校

今アメリカにいる友達がいる。ボストンに住んでいたことのある帰国子女の友達もいる。カナダから留学にきていた友達、フランスに留学している友達。自分の生きる狭い世界から飛び出して未知の世界を知りたいという膨大なる知識欲から外国へ。憧れがある。しかし、私はできなかった。いやしなかったのだ。

アメリカに留学中の友達は、同じ学校・英会話教室に通っていて、同級生という共通点の多さもあり、すぐに仲良くなった。レッスンをともにすることは少なかったが、ともに競い合い、外国とかかわりのある職に就きたいという夢を語り合った。脱落したのは私だ。周りの英語力の高さ、自分には追い付けないのだという底知れない不安が私を追い立てた。第二言語を学ぶというのは、意味から音に入ってしまうため、物心のつく前からその言語に触れていないと難しいものだ。英語のイベント、コンテストはいつでも同じクラスのほかの子が選ばれる。そんな自分自身に満足がいかない毎日にほとほとうんざりして、才能と環境を言い訳に夢を放り出し、逃げ出した。自分の置かれた境遇、自分に甘い世界でただ胡坐をかく方を選んだのだ。高１の冬。そんな劣等感を抱えた私とは裏腹に、友達は留学にいく、といった。ありえない、どこかで絶対にくじける。挫折をするに決まっている、周囲との差がわからないのか。気づくことができないなんて愚かだとまで思った。自分は賢くて冷静だから、いち早く自分の位置に気づいてベストな選択をしたのだと優越感さえ感じた。いや、優越感で自分をだましていないと後悔にさいなまれることがわかっていたのだ。友達から、１度目の留学の試験は不合格だったという知らせを受けた。同級生も多くその試験を受けて、不合格をもらい、留学を断念したそうだ。しかし、友達はすぐに次の機会に向けて準備を始めた。１年間、アメリカへ。高校時代の三分の一を外国で過ごし、しかも受験勉強で忙しくなる高校三年時に外国に住むプランは周りの大人たちを憤慨させるには十分であった。一度の不合格と、大人からの批判。しかし、くじけるどころか、毎日努力した姿をわたしは知っている。夢をあきらめたときから、気づいていても目をそむけていた現実に気づいた。私はただ嫉妬していただけだ。私は、広大な未知の世界に憧れながらも自分の狭い世界に閉じこもり、安全ななまぬるい生活を守ろうとしていた。友達は自らの未熟さや、未知の世界への恐怖心をも抱えて狭い世界から飛び出したのだ。敵わないからと諦めて挑まなかった私と、敵わないことに対抗心を燃やして挑み続けている友達。留学の合格を報告してくれた時、心の底からともに喜ぶことができた。もう二度と不甲斐ない理由で夢をあきらめるなとほほをはられた気がした。彼女は今、アメリカで頑張っている。そして、時々通話をして近況報告をする、その間もお互いに負けないぞと思いながら。

世界を見に行くこと、世界を、言語を、文化を学ぶこと。それを望む人は数知れない。しかし、多大なる勇気の一歩を要することであることも間違いない。その勇気を抱え、世界に飛び出した人をたたえるとともに、「さあ、追いつくぞ」と高らかに宣誓したい。